風の駅壱番館

１．生活の場としての支援は十分？

私たちの生活～食べたいものがあれば外食に行く。着たい物があれば洋服を買いに行く。飲みたいものがあればコンビニへ行く。読みたい本があれば書店に行く。旅行に行く。買い物に行く。コンサートに行く。映画を観に行く。きりがありませんが、私たちは当たり前のこととしての日常生活です。障がいのある人たちの日常生活はどうでしょうか？そこには大きな隔たりがあります。風の駅壱番館の暮らしはどうでしょうか？私たちとは大きな隔たりがあります。地域で暮らしているということは一定の評価をしてもいいのかもしれません。しかし、生活の場としての支援は限定的なサービス提供にとどまっています。風の駅単体としてのサービス提供には限界があります。そうであるならば外部サービスを積極的に活用して、より豊かな生活の実現に努力する必要があります。また、なごみかぜのスタッフさんひとりひとりが、障がいのある人が地域で生活することを支える担い手となっていただきたいと思います。例えば外出支援を担っていただくとか。より多くのスタッフさんが担い手となっていただければ、ひとりにかかる負担が軽くなります。ぜひご協力いただけるようお願いしたいと思います。

２．終の棲家とはならないですが・・・。

日常的に医療が必要な状態になった場合とか、介護度が一気にあがりすべての日常生活が全介助になったりすると、風の駅壱番館での生活の継続は難しくなります。そして。

６５歳に達すると介護保険サービスへの移行が検討されます。その場合、要介護度３の認定が必要となります。この考え方を機械的に運用するつもりはありませんが、残念ながら風の駅壱番館が終の棲家ではないことに変わりはありません。ただ、可能な限り継続できるよう配慮していきたい思います。

（文責：大場保治）